

14 順天堂院長 佐藤進のベルリンから の手紙

酒 井 シ ヅ

順天堂の三代目の堂主、外科医佐藤進（一八四五〜一九二二）は明治二年（一八六九）にドイツに留学し、一八七四年（明治七）にベルリン大学を卒業し、翌年に帰国したが、この間に郷里や友人に宛てて出した手紙が現存する。最近、その手紙が数通、進の生家から見つかった。それらには当時のベルリンの事情、留学生の事情を記している。なお、佐藤進は弘化二年（一八四三）十一月一日に常陸国久慈郡太田村（現茨城県常陸太田市）の醸造家高和清兵衛の長男に生まれ、安政六年（一八五九）に一五歳で順天堂入門、慶應三年（一八六七）に順天堂二代目堂主佐藤尚中の養子になった人である。戊辰戦争では会津攻略のとき、官軍の白河陣地の治療所の頭取をつとめ、そこで自分の無力を知り、戦後直ちにドイツ留学を決意し

た。一八七〇年（明治三）にベルリン大学に入学、その翌年の一八七一年五月廿日（明治四年未四月九日）に岡本道庵（順天堂の塾頭、義弟）に宛てて出した手紙に日本政府が雇用したドイツ人教師について以下のように述べている。

「過日東校ノ諸学生来着後差出し候愚状、既ニ御地元着御披見相成候事ト愚考仕居候、此度当地ヨリ医学教師兩人本邦え出帆相成申候、昨年中当地発帆ニモ可成候処、御存し戦争一件、是迄因循ニ打過居申候、兩人共僕ノ知人、至テ実直ノ人物學術共本邦ハ勿論当地之教師ニいたし候ても無差支医士ニ御坐候、是迄本邦ニ教導いたし居候英仏ノ医師トハ人物ヲはしめ學術共場之違ひ可有之と愚考仕居候、皇歴四月十八日頃当地発帆之覚悟ニ御坐候間六月下旬ニハ本邦横浜え到着ニ可成ト愚考仕候、依テ此度右兩人え愚状相託し申候、忝人ハ「ホフマン」忝人ハ「ミルレル」と申医士ニ御坐候、「ホフマン」ハ内科最モ精シク殊ニ胸部ノ病、「ミルレル」ハ尤モ外科ニ長し居候様子御坐候、乍去右兩人ニテハ医士モ不十分、追々欧州之学則ニいたし不申候テハ相成間敷候、然ルニハ解体

学・舎蜜・人身理学・病理等ノ科ヲ分チ、其ノ科ニ從ヒ各専門ノ教師ヲ撰ヒ不申候テハ実功モ相立チ申間敷候、

右兩人ノ教師モ其覚悟ニゴ坐候、一時ニハ難相成候間追々右之学則ニ可相成ト奉存候、欧州開化之地より参り候ては当分本邦ノ風習ニモ不習申候、一時可驚事ト遠察仕候、殊ニ青諸生之暴論等被行候テハ実ニ困窮ノ次第御坐候」

また、この手紙では明治四年に私費留学生から文部省留学生に切り替わったときの安堵を次のように伝えている。「此度僕儀朝より普国留学被仰付難有事ニ御坐候、此ノ上ハ別テ安心留学モ相成可申候、僕留学中之様子先便父えも委細申越し候、学業モ存外之進歩ニ候間御安心可被下候、留学中ハ仔々(孜々)精業、此度渡海仕候、教師ニモ劣リ申間敷様成業之覚悟ニ御坐候、乍去人生限アリテ学事限ナシ、留学モ四五年ヲモ期シ成業仕度僕之意中ニ御坐候、御存ノ通り欧州ハ開化ノ美国、殊ニ当地ニハ哲医林立、学則モ甚正シク学術愈難タシ、本邦ニエ是迄修業仕候事ハ欧州え参り候テハ格別之益ニモ相成不申候次第、実ニ恥入候事ノミ、此ノ後追々留学之者モ成業之

上帰朝相成候ハ、漸々欧州之学則ニモ至タリ可申ト愚察仕居申候」

この他の手紙のうち、明治七年の岳父佐藤尚中宛の手紙には佐藤進がベルリン大学で医学士の卒業試験、論文、授与されたときの事情を記している。これまで進が日本人として最初のベルリン大学医学部の卒業生であることは、自伝などに記しているが、この手紙に進が医学士の学位記を受けるときの感激、それをドイツの新聞が快挙として報道したことなどがこれまで知られていなかったことが記されている。

(順天堂大学医史学研究室)